

特集 公開シンポジウム プロジェクトA 1

労働のジェンダー化 パート3 アンペイドワーク

第1部 グローバルな視野からみるアンペイド・ワーク

報告者：古田 睦美氏（長野大学）

コメンテーター：立岩 真也氏（立命館大学）

司会：姫岡 とし子氏（立命館大学）

第2部 咲き揃う女／母／労働者

「道標」期前後の宮本百合子テキストに見る女性表象

報告者：黒澤 亜里子氏（沖縄国際大学）

コメンテーター：中川 成美氏（立命館大学）

司会：池内 靖子氏（立命館大学）

日時：12月13日（土）14：00～19：00

会場：存心館802教室



シンポジウムの主旨

立命館大学のジェンダー・スタディーズ研究では、過去 2 年間にわたって「労働のジェンダー化」に関する学際的なシンポジウムを開催してきました。1 年目は、労働はもちろん、労働研究もジェンダー化されているという観点から、その現状をのりこえるために「労働のジェンダー分析の可能性」をテーマに据えました。1 部では、法学および社会学の観点から、現代における労働をめぐる状況変化とその問題を取りあげ、2 部では労働がどのように表象され、それが労働のジェンダー化をどう構築したり、強化しているのかを文学および映画を題材にして考察しました。制度と表象の 2 つの側面から労働について論じるのが、このシンポジウムの特徴となっています。

2 年目は、セックス・ワークをサービス労働・感情労働の一種として位置づけるという「性の商品化」論の台頭を念頭において、「買売春と労働概念」をテーマにすえ、性労働は労働であるのか否かについて、白熱した議論が展開されました。

3 年目の今年、「アンペイド・ワーク」を取りあげます。アンペイド・ワークが日本で本格的な学問分析の対象となったのは今から 20 年ほど前のことですが、当時、この用語で議論されたのは、もっぱら家事労働でした。最近では、少子化や高齢化が進展するなか、政府レベルでもようやくアンペイド・ワークに関心を向けるようになりましたが、問題にされているのは介護や育児など広い意味での家事労働と、これに関連したボランティア労働だけです。

アンペイド・ワークに関する世界の認識は、この間に大きく変化しています。家事領域に限定してアンペイド・ワークを捉えるのは、北の工業国中心主義的な見方で、そこでは「南」の発展途上国におけるアンペイド・ワークは視野に入っていません。しかし、グローバル化の進展する今、「北」と「南」の双方の問題と、その相互関係に眼を向けることこそが求められているのです。

今回のシンポジウムでは、グローバルな視点から、グローバル化のなかでのアンペイド・ワークに注目してみたいと思います。現在の世界システムのなかでアンペイド・ワークは、どのような位置を占め、どのような作用を果たしているのでしょうか。また各地域や社会に固有のアンペイド・ワークとはどのようなもので、グローバル化のなかで、どのように変容しているのでしょうか。アンペイド・ワークとペイドワークはどのような関係にあって、そこにジェンダーや地域文化がどう絡んでいるのでしょうか。女性の労働は、それぞれの社会のなかで、どう評価されているのでしょうか。

ILO（国際労働機関）の算定によれば、女性は世界の労働の 3 分の 2 を行っているにもかかわらず、収入は 5 % しかありません。その主な原因は、女性のアンペイド・ワークにあります。「労働のジェンダー化」の連続シンポジウムは、労働概念と労働研究のあり方を見直すことを目的にしています。アンペイド・ワークは、まさに、この目的にふさわしく、また不可欠なテーマです。